

スキー発達についての研究

鈴木 正

1. スキーの元祖
2. スキーの語源
3. スキーの起源についての諸説
 - 1). 北欧発祥説
 - 2). 中亜発祥説
 - 3). 極東発祥説
4. ノルウエー・スキーの発生
5. オーストリアのスキー
 - 1). ズダルスキーのアルペンスキー
6. ノルウエー式とオーストリア式の論争
7. ビルゲリの功績
8. スキーの天才シュナイダーの出現
9. 日本のスキー
 - 1). 日本スキー開始日諸説
 - 2). 日本スキーの恩人長岡とレルヒ
 - 3). 日本最初のスキー競技
 - 4). 北海道におけるスキー
 - 5). 大正時代のスキー
 - 6). オリンピック初出場
 - 7). 昭和時代のスキー
 - 8). 終戦後のスキー

1. スキーの元祖

スキーの起源は、極めて古く、5000 年或は 6000 年以前¹⁾とも言われ、その発祥の場所や、年代については色々な説があり明確なことはわかっていない。

そしてスキーは初めから、滑るスキーとして存在したのではなく、その元祖は雪上の歩行具として、現在の「輪かんじき」の形で誕生し²⁾、この踏雪歩行具が漸次改良されて、先づ随円形となり、更に進ん

で先と後とがそれぞれ適当に持ち上げられ、進行の際抵抗を幾分でも除くよう工夫され、製作材料も灌木、竹材、蔓などから毛皮、板などに変化し、だんだん踏雪具の範囲を脱して、よりスピーデーな滑雪具となり、橇型になったと考えられている。

2. スキーの語源

スキーという語が物音、擬音から出て来たらしいことは一般に認められている。すなわち、雪の上を滑るときに「シュー」とか「キュッ」とか、まさつてきしむ音が出るので、その音になぞらって、この語ができたと考えられている³⁾。

先づ、その言葉を考察してみると、スキーという意味をもっている言語には、次のようなものがある。

- (1) フィンランド系の Suksi スクシ・ツングース民族は「スクシルデ」と言い、それをフィンランドでは「スクシ」と省略した。
- (2) ドイツ語系に属する「Schi」シー
- (3) 英語系の「Skee」「Ski」スキードイツ語とフランス語と英語との混合語といわれるノルウェーでも「Skee」又は「Ski」と称した。

これらの語は、それができた当時にさかのぼって調べて見ると「分ける」とか「木を裂き割ったもの」「二つの木片」というような意味があり、次いで「傾斜する」とか、「制動する」などの動詞的意となり、更に又雪靴、あるいは軽艇、雪艇などの名詞としての意をもつようになったということである⁴⁾。現在では英語を用いる国ではすべて「Ski」ドイツ語系の国では「Schi」と称している。

明治 44 年オーストリーのレルヒ少佐が、来朝して、高田歩兵第 58 連隊で、スキー技術を最初に指導した(後に詳述)当時の記事には、スキーに「穿橇」のあて字が使用されており、また人によっては「履橇」とか「雪橇」という字も用いた。高田連隊長堀内文次郎大佐はこのスキー発展のため長岡外史師団長と共に大変貢献のあった人で、スキー

の日本語として「雪艇」を提唱した⁶⁾が、結局は原語のままスキーという言葉で日本に広まった。

満州人や樺太の土民の一部である「ツングース族」は雪靴を「Suk」とか「Sok」と呼んでいる。また「チャナー」とも呼ぶがこれは、露語の「サニア」(橇の意)の転化らしい⁶⁾。

更に北鮮では、冬はく日本の「かんじき」のようなものを「ソマー」とか「Syolma」(雪馬)と呼んでいる。樺太及び沿海州地方では「Shutu」(シュトー・ストー)と言っている。

これ等の発音がみな幾分共通な所がある点からみると語源には何か関係があるものと考えられる。カナダでは「ラケット」と呼んだ⁷⁾が、これはかんじきの形が丁度テニス用のラケット型にできていたことによる。

ドイツ語の「Schi」につながるのある単語を拾って見ると、Schiff(船), Schief(斜め), Scheit(木片, 薄板)などがあり、これらの語幹の原義は、「滑らかな流れるような動き」ということである⁸⁾。

3. スキーの起源についての諸説

前述の如く、積雪の多い地方では、洋の東西を問わず、日常生活上の必需品として、その積雪に対する何等かの歩行用具が古くからあったことは史実の明示するところである。

そしてこれが滑走具のスキーとして発祥したことについては、次ぎの三つの起源説が挙げられる。

1. 北欧発祥説
2. 中亜発祥説
3. 極東発祥説

1) 北欧発祥説

ヨーロッパにおいては、スキーの元祖ともいべきものが、すでに紀元前 15 世紀の中葉頃から、紀元後 5~6 世紀の間にノルド(nold)族によって考案されていて、それが彼等の北欧移動に際し充分に活用されて以来、しばしば同族が、戦争その他の目的で猛訓練をした史実

がある⁹⁾。

また北欧の神話¹⁰⁾には、スキーの神様というのが登場してくる。

すなわち、スキーの男神ウル (Ullr) は弓矢の腕とスキーにかけては並ぶもののない名手であり、その鎧甲に身を固めた姿は、また比類なく美しく、りりしかった。彼のはいているスキーは、右と左が違って描かれている。一方の足には、長くて細い滑る板をつけ他方右の足には、短く幅広い、裏に毛皮を張りつけた板をつけている。つまり、毛皮をはった方の足で蹴り、細長い方で滑るようにできていたのである。このウルは重要な地位を占め、大きな尊敬を集めていたので、今日でも、ウルに因んだ地名が、ノルウェー、スウェーデンに合せて 80 ケ所もあるという¹¹⁾。

一方スキーの女神としては、スガディ (Skadi) ……スカオイ又はオンドゥルディスとも呼んだ……があり、「きらめく神々の花嫁」とも言われ、スキーをはいて狩する女神であった。今日スカンディナ비아と呼ばれるその名称は、本来「スカディの半島」から出たもので、「スカディ」と「アヴィエン」……島の意味……の合成語であると言われている¹²⁾。

現在ストックホルムのネルデース博物館には、紀元前 2000 年頃のスキーが保存されていたり、また北欧には峡湾などの岩に彫まれた彫刻がかなり多く発見されて研究されているが、泥炭層におおわれて保護されていたものもあって、先人達が石器で彫りつけた跡が残されている。これらの中で最も古いとされているものは、ノルウェーの北部の極地圏内のラダイ島で 1929 年に発見されたもので、スキーをはいている人物の彫刻がある。人物が 15 cm、スキーの長さ 15.5 cm で B. C. 2500 年頃のものとして推定されている¹³⁾。

また湖沼の底から出土したスキーの木部で最も古いものはスウェーデンの中部ホテイニイで発見されたもので、沼沢の水にタンニン酸が含まれているために腐らないで、原形をほぼ留めている。これもやはり B. C. 2500 年頃のものとして推定されている。

スキーに関する記述としては、ビザンチン帝国の歴史家、プロコ

プ¹⁴⁾ (Prokop) ……プロコピウス¹⁵⁾ (526～559) のものが最も古いらしい。この記述は、スクリドフィナル (Skridfinnar) のレースについて書かれている。Skridfinnar とは「滑るフィン人」という意味であるが、プロコピウスのこの記述には、滑る道具が何であったかについては書かれていないが、ある種のスキーであったことは明らかである。

実際にはっきり知られているスキーの起源は、10 世紀前後で、北欧において、その記事を見出すことができる。しかしその当時どの程度に発達し、行われていたものかは不明である。

北欧の古記や古謡には、スキーか、スキーらしいものについての記録が残っている。紀元 1200 年頃の記録には「スキーを売る」とか「スキーをはいて滑走する」とか、「曲がった板の上によって、矢の如く雪の上を駆ける」というような記述がある¹⁶⁾。

スキーを木版図で説明したものには、1550 年にヘルペンシュタインがベニスで刊行した書物があり、またスウェーデンのウプサラの大僧正オラウス・マグヌス (Olaus Magnus) は 1555 年ローマにおいて北欧の人々の生活について著書の中に「平らな木の靴で、長く、先端は弓のようにそり上っている」とスキーについて書いている。しかし、そのさし絵を描いた画家は実物を見たことがなかったので、踵より後のスキーの後半部のない絵を描いている¹⁷⁾。

2) 中亞発祥説

スキーの北欧発祥説に対して、スキーの起源は、アジアの方が古いと説いている人もある。

日本では元早稲田大学の東洋史の白井長助教授などもその一人であり、ホオクという学者は、北アジアの内部から始まったもので、おそらく蒙古人種の発明であろうと言っている¹⁸⁾。

大野精七博士の話では、ギリシャの歴史家 Herodotus (B. C. 484～424) の世界歴史によれば、すでに西暦紀元 5 世紀頃アルタイ山脈地方に居住する民族が山羊足をもって雪中を走ったと記録してあるが、それは冬季スキーをはいて山羊のように自由に雪上を走った習俗を説話化したもので、スキーに関する最古の文献であると述べている¹⁹⁾。

また日本山岳会員高橋文太郎氏は、上代、北亜地方で獵狩民に実用されていた「木馬」と称するスキーの存在を認め、その本源地はバイカル湖の近くのサヤン (Sayan) 山脈地方だと述べている²⁰⁾。

また一説には、中央アジアのツングース族がスキーの開祖であるとも言っている。これらの説では西歴紀元前、人類創生間もなく、中央アジアの降雪地方の者が考案したもので、それがだんだん変化改良されたものであろうと言うが、記録として残されている最も古いものは B. C. 529 年頃より 559 年頃迄の間に北欧のフィンランド地方で或種のスキーを使用した事は顕著な事実である²¹⁾。この事から今日北欧がスキーの根源地のように思っている人々が多いらしいが、ラップ人もフィン人も共にアジア人種に属する者であり、結局は、北欧へははじめにスキーを伝えたのはアジア人種なのだというのである²²⁾。

中国の古書「山海経」……紀元前 2 世紀頃の日本の神話の如きもの……には「有釘靈国、其民從膝已下有毛馬蹄善走」(釘靈国あり、その民膝より以下毛馬蹄あり善く走る)とあり²³⁾、東夷伝の流鬼国(樺太)の条下には、スキーの構造が記録されているということである。

以上のことから、アジア発祥説では要するに、スキーは今から 2500 年以上前に既にアジアにおけるアルタイ山脈や、シベリアのバイカル湖南部地方にあった神話的夢の国釘靈国に発生したものとされ、住民はそれを雪上の交通具として使用していたと考えた。そして更にそれは北アジアのシベリアに拡がり、東西に分れて、一方は樺太からカムチャッカを経てベーリング海峡を渡り、アラスカのエスキモーに伝わった。このため、エスキモーは今でも古代スキーのままの型を残している。他の一方は西に進み、フィン人、ラップ人によって、スウェーデン、ノルウェーに移されて発展したというのである。

3) 極東発祥説

前の二説に対して、更にその本源は極東地方であるという説もある。大正 15 年 2 月発行の「山とスキー」誌第 57 号に、六鹿一彦氏の「ストーについて」なる執筆によると、

樺太およびシベリアの一部で使われている源始的雪具「ストー」は、

スキーの前身にあたるもので、これが早くから、東部シベリアのベーリング海峡やオホーツク海峡沿岸方面に発現し、それが中央アジアに伝えられ、スキーとなって更に北歐スカンジナビア半島方面に伝わったことを主張し、スキーの発祥は極東方面だと見るべきであるというのである。

また、リチャードソンの、「Skirunner」には Chrichton Somerville 氏が、スキーの発現地はベーリング海峡であると主張している事が記してあるという²⁴⁾。

従来スキーの歴史について書かれたものは皆西欧人の手によったものであるため、東部アジアや極東方面の種々の事情、雪具などについて殆ど知られていないため、材料の局部的に限られた西欧人の説のみが信じられていた傾向が多い。この点から、中央アジア説、極東説をもう一度ふりかえて一層精細な研究が必要である。

以上の如く、スキーの起源は極めて古い年代のことであり、各種の説も現れ、明確に知ることはなかなか困難である。

しかし初期には積雪地方の生活必需品として生れたことは確かで、それがだんだん改良され、紀元 1000 年頃からは軍隊にも使用されたことは確かである。その後暫くこの実用的スキーは、大した発展もなく低調のままであった。

そして近代的スキーは、先づノールウェーから発展しはじめたのである。

4. ノルウェー・スキーの発生

スキーが一般に知られ、実際に利用されるようになったのは、比較的近代のことで、17 世紀に至ってみるべき発達の端緒が開かれた。

18 世紀の後半、ノルウェー・スウェーデンにおいては、現在のものとはほぼ同様の形状のスキーを用い、かなり広く伝わり、それが南下して、ドイツ、ハンガリーの地方からアルプス山地方に伸び異常の発達をとげた。

一方英国および、カナダにおいても、特殊の発達をなしたが当時このスキーの用途は主として、旅行や狩猟等の実用方面のみであった。

スキーがスポーツとして取入れられるようになったのは 19 世紀後半に入ってからである²⁵⁾。1867 年オスロー郊外の丘で競技会が開催されたとき、ノルウェーではスキーを国技とすると決議された。

それより前すなわち 1774 年ノルウェー軍隊におけるスキー訓練規定があった事実があり、更に 1808 年スウェーデン・ノルウェー戦争において、ノルウェー軍隊は 2000 人よりなるスキー連隊をもち、大なる効果をおさめたことがある。

このようにして、それまで発達の方向が実用方面のみであったが、前述の如く、1867 年以後に至り、発達の方向に一大変化を来とし、スポーツとして誕生したわけである。

1870 年代には、クリスチianiaおよびテレマーク地方のスキー愛好者達は、スキー団体を作って練習をはじめた。1877 年（明治10年）にテレマーク地方の一農夫が、クリスチianiaの大会に出場して、素晴らしい廻転をやって見せて皆を驚かし、以来その廻転技術をテレマークと呼ぶようになったことはよく知られている話である。

そしてこの時欧州最初のスキークラブとしてスキー歴史の第一頁を飾る「クリスチiania・スキークラブ」が創立されたのである。

しかし、アメリカではこれよりも 10 年前すなわち 1867 年に、アイザック・ステュワートの尽力によりカリフォルニア州のラ・ポートにアルツラース・スノールシェー・クラブというスキークラブが設立された²⁶⁾。これが世界最初のクラブであるが、アメリカのスキーも元をたどって見るとノルウェーからもたらされたものである。

1879 年には、ノルウェーの首都クリスチiania（現オスロー）に近いヒュースピーの丘という所で、第一回ジャンプ競技が開催された。この競技会に出場した選手達は長い棒を持って、出発からその棒に打ちまたがって、箒に乗ったような恰好で、踏切からジャンプするというよりは、その棒でスピードを殺して、当人は飛んだつもりらしいが実はボトリと落ちそのまま傾斜の下まで転がり落ちる程度のものだった。

た。ところがテレマークの少年達はこれと全く違って、棒などは持たず、踏切点に向かって出発から猛然と滑り、ヒラリと空中に浮び実際の飛躍をして 50 呎以上もとんで着陸し、下の広場を滑り下り、急激な回転をやってピタリと止まり、滑って来た斜面に向かってスックと立つという鮮かな方法をやってみせた²⁷⁾。実にテレマークの少年こそ現代スキー飛躍技の元祖であった。

スカンジナビア半島のスキーは、このような歴史をたどって発展した。

1883 年（明治 16 年）には「ノルウェースキークラブ」ができた。これはクリスチャニアクラブが首都だけに限られていたのを全国的に統合したものである。この時は会員は 130 名であった。

はじめは、テレンマークの農夫達の技術が優れていたが、間もなくクリスチャニア町の人達に勝てなくなった。それは農夫達は大して練習の必要を感じていなかったのに対し、町のスポーツマンは練習にはげみ、研究もし、どんどん技術を向上させて行行ったからである。

1888 年にはナンゼン (Fridtjof Nansen 1861—1930 ノルウェーの探検家) がスキーによって、グリーンランドの横断旅行をし、スキーの価値を大いに世人に認識せしめた²⁸⁾。氏は 1891 年に「雪靴でグリーンランドを通りて」という紀行文を著した。

1892 年（明治 25 年）には、スウェーデンスキー協会ができ、この年有名なホルメンコルン競技会が開かれ、スウェーデン選手も出場した。更にそれから三週間後には、ストックホルムで、最初の国際スキーレースが開催され、距離レースは長距離王国フィンランド、ジャンプ競技は元祖のノルウェーが優勝した。

このようにして軌道にのったスポーツとしてのスキーは、1900 年代に入って益々発展し、漸く欧州各国に普及するに至った。

その中最も特殊な奇抜な発展を見せたのは、ズダルスキーのシステムであるアルペンスキー術である。

5. オーストリアのスキー

オーストリアのスキーといえば、何と云っても、ズダルスキーの苦心研究によるリリエンフェルト式が第一だが、それよりも以前にスキーの歴史の記録がある。

オーストリアのバルバッサー (Valvasor) が 1689 年に出版した「クライン公爵の名誉」(Dis Ehre des Herzogtumes Krain) という著書に、アドリア海に近いクラインの農夫達は、5 呎程の短いスキーが上手だったし、又リーゼンビルグ地方では、かたい雪上で、短スキーが使われていたという記録がある²⁹⁾。

1874 年に、北極探險から帰ったペイヤー (payer) が 1 組のスキーを持ち帰り、この頃から、オーストリアにスキーが広がった。そしてその頃、普及に貢献した人としては、グラフ・ハラック (Graf Harrach) と、マックス・クライノシュegg (Max Kleinoschegg) の二人がいる。前者は 1887 年に自分の獵人に、ノルウェー製のスキーをはかせたし、後者のクライノシュegg は、ノルウェーのスキー走者の絵をイギリス新聞で見て、スキーに興味をもつようになり、ノルウェーのスキーヤーと文通して技術の説明書を手に入れたりして研究した。

1892 年に、スタイリッシャー・シーロイファーというスキー団体が作られ、1893 年には、この地方最初のスキー競技会がミュールッシュラッグで開催された³⁰⁾。

そして、ズダルスキー時代となるのである。

1) ズダルスキーのアルペンスキー

ノルウェーで、スポーツとしてのスキーが盛んになりかけた 1890 年 (明治 23 年) 頃、オーストリアに、マチアス・ズダルスキー (Mathias Zdarsky) という変人がいた。

彼は哲学者で、画家で、工科大学出身という機械学者でもあった。その上体操がうまく、冒険心に富んだ旅行家であった。それでいて常に孤独を好み、森に住み、家も料理も自分で作って生活していた。

彼は 1889 年頃からリリエンフェルト付近のハベルンライトの山小

屋に住んでいたが、その頃、ノルウェーの探險家ナンゼン博士 (Fridtjof Nansen 1861-1930) が「グリーンランド縦断記」という書をロンドンとハンプブルグで刊行した。この著を手に入れたズタルスキーは、深夜、時の過ぎるのも忘れて興味深く読みふけた。

常々山小屋の生活で、冬季雪のとき食糧や燃料の運搬に苦勞して、何かよい方法がないかと考えていた彼は、このナンゼンの著に、スキーというものを使って、雪の中を楽々と快走しているとあるのを読んで、「さて一体このスキーとは何ものだろう」と疑問を懷いたものだ。事に當って情熱的で頑固、物に対して徹底的だったこの森の変人は早速手紙を出して、ノルウェーから一台のスキーを取りよせた。その時届いたものは、「ケーン・ビンデング (Cane binding) という式の締具であったという。Cane は^{トウ}籐蔓のことであるから、植物の皮か蔓を紐にして作った締具だったと思われる。ある書には、その時のスキーは非常に長く、締具は爪先を引っかける簡単な輪と踵にまわす籐とからできていたと書いてある。凝り性のズタルスキーは、この時以来すっかりスキーにとりつかれ、以後六年の間、たった一人でスキーの用具と技術の研究に没頭した。

機械学の素養をもち、力学的知識もあるので、このスキーの締具、技術の研究は普通人のそれとは比較にならなかった、試案、試作いろいろ苦心すること6年、その間に二百余種類の締具を発明試作したという、その熱中さがうかがわれる。スキー技術の面においても独力で、高地アルプスに適するものを体系づけ、その地名をとって「リリエンフェルト・スキー術」と名づけた。この技術の特長は、短いスキーをはき、太くて長い一本の杖で制動して廻転しながら急傾斜を安全にくだる式の「シュテム・ボーゲン」(制動廻転)を奥儀として強調した点にある。

この技術は中欧のアルプス地方の如き、急峻な地形に適するものであるから、氏の懇切な指導によって、急速に中欧に普及し、ノルウェーの軽快な絢爛たる技術と対立するようになった。

ズタルスキーは、1897年(明治30年)自分の技術を体系づけて

「リリエンフェルト式スキー法」なる著書を刊行し、スキー技術に科学的基礎を与えた。これはスキー史上の画期的な出来事であった。

このズダルスキーのスキーはまた「アルペンスキー」とか「オーストリー式スキー」等とも呼ばれている。明治 44 年日本にレルヒ少佐が来て、高田師団で指導したのが、この派のスキーで単杖（ストックが一本だけ）であったのが、現在と違った方法であった。

少し冗長になるが、ズダルスキーの指導力や、技術について二三のエピソードを拾ってみよう。

スキーの組織立った講習会、すなわち「スキー学校」を最初にはじめたのも彼で、1901 年の冬からはじまり、年々盛んとなり、ある時は 1600 名をたった 1 人で指導し、「私の言うとうりにすれば、2 日から 6 日で山地を安全に滑れるようになれる」と言って自信をもって教え、彼の教育法は重点的で、指導内容は徹底的に単一化されていた。

1896 年に、彼は長さ 120 m. 傾斜 22 度のコースを作り、好条件のときは、そこを僅か 4 秒で滑ってみせた。これは時速 108 km になる。

ウィーンの、ある婦人は「彼が杖なしでとばし、アッと言う間にシャンツェもない所でトンボ返りをやって、驚いている彼女の目の前に鮮かなクリスチャニヤどピタリと止まったのを目撃した」と語っていたというから、相当の達人であったことがうなづける。

また、ある時は、怪我をした大男（身長 2 m 近く、体重 106 kg もあった）を背負って村まで転ばずに滑り下りたという記録もある。

彼は興味に乗ると、立て続けに廻転したり後向きに滑って回転したり、スキー・ワルツをやって見せたりしたとも伝えられている。

これらの話は、どの程度まで本当かわからないが、とにかく超人的な技能をもっていたことは確かである。

この章の主な参考文献

1. 「スキー講座」. I P. 18 P. 76
2. 「日本スポーツ文化史」P. 198
3. 「学校体育」昭 26 年 11 月号 P. 46

6. ノルウェー式とオーストリー式の論争

先に述べた北欧地方のスカンジナビヤに発達したスキーは、その発展の国名をとって、ノルウェー式スキー術と称されているが、これに対し、前述のマチアス・ズタルスキーの苦心によって、中部欧州を中心としてアルプス地方に発達したアルペン派スキーはオーストリー式スキー、又はリリエンフェルトスキー術とも呼ばれている。

スキーにおけるこの二大系統は、技術上相当の違った方法をもっているので、その長短をめぐって、相当激しい対立論争があり、1905 年には、実力によって技術の優劣を決しようとして進展したことがあった。

すなわち前者は、あまり急峻でない丘陵地帯に発達したスキーであるから、スキー競技に向き、技術が軽快で優美であり、ジャンピング、長距離競走等にその精を誇り得るものであり、後者アルペン派は山岳を背景として発展したのであるから、技術面は地味で確実性があり、理づめにできているだけに、学び易く、達し易いという長所をもっているが、何となく単調で、面白味が薄いという点もある。これは山岳の実用的方面に価値をもち、ツアーとして適する技術である。

この論争は 1900 年頃から激しくなり、各国の権威者もこれにまき込まれ、1905 年には、リリエンフェルト派の挑戦により、1 月 6 日から 8 日までの間に、急峻な斜面で、現在のスラローム（蛇行状曲線を描いての滑降、普通はスキーの廻転競技を指す場合が多い）のような競争をやろうというのであった。すなわち、ズタルスキーが選んだ三つのコースで三回競争をする、コースには旗をたてるという条件だった。物好きな人は、勝った方に 3000 クローネの賞金まで出すという熱の入れ方だった。しかしノルウェー・スキー連盟は、ていよくこの挑戦を断ったので、この決戦は実現しなかった。

このような論争があった事は、その後のスキー技術発展のために大きな貢献をもたらす結果となったことにおいて価値があった。ターンの技術と、スピード化に対して一段の進歩を示す結果となったのであ

る。

この対立は、その後日本に伝わったスキーが、レルヒ少佐（氏は、ズダルスキーから直接指導を受けたことがある）によって、高田に種子をまかれたオーストリー式と、北海道に伝わったノルウェー式との間にも幾分の対立があったことはもちろんである。

この二系統は、結局それが発達した地形上から分れるべくして分れたもので、無理にその優劣を争うこともないと思う。山スキーには、アルペンスキーが適し、ゲレンデならノルウェー式が面白いから、色々な地形に応じて、その長所を生かして用いらるべきであろう。

結局その後、この二派は、時代の進展と共に歩みより、両者の長所をとって折衷したスキー術も生じた。この二者を統合して、両者の長所を取り入れ、アルプスに適應させた功績者としては、先づビルゲリをあげねばならない。

「スキー講座」Ⅰ P. 18

「学校体育」昭和 26 年 11 月号 P. 46

「スキー講座」Ⅲ P. 140

7. ビルゲリの功績

スキー史上の二大巨匠、ズダルスキーとシュナイダーの間にビルゲリ (Bilgeri) があったことを忘れてはならない。

ビルゲリは、1873 年オーストリアに生れ、20 歳の時からスキーを始めた。その頃最初に手にしたのが、ズダルスキーの著であった。故に彼が、最初に覚えたのはリリエンフェルト式であったが、その後これとノルウェー式との論争を見ているうちに先づズダルスキーの単杖を二本杖にかえた。しかしこれは決してノルウェー式を取入れたわけではなく、ノルウェー式の欠点と思われる点を見逃さなかった。それは谷廻り回転がよくできず、軟かい深い雪を苦手とすることなどに気がついていた事で、この両者には、それぞれ長短があり、一方だけをとるというのではなく、両者の勝つれた点を取り入れて生かすべきだと考え、ズダルスキーの山岳地をシュテム系回転によって転ばずに安

全にという根本的考え方に技術の中心をおいて単一化した点を継承し、ノルウェー式からは両杖をとり入れ、ホッケ姿勢（滑降時、重心を低くして体の安定をはかるかがんだ姿勢、Hocke ……前屈みの意）を基本とする技術を取り入れ、この二系統から更に一歩進んだ近代スキーへの橋渡しの役目を果たしたことにその功績がある。

用具の改良にも研究心が旺盛で、ズダルスキーがスキー滑走面の溝をなくしたのを、とりもどし、締具の改良も行い、ビルゲリ・アイゼンという横すべり止めの鉄片を考案したりした。彼はオーストリアの山岳兵大佐になったすらしとした紳士で、1901年にアルプスで兵隊にスキー訓練をやった結果、軍隊に入る前のスキー練習の重要性を感じ、1906年以降は一般人をも指導するようにした。そして3万人以上にも上る人々にスキーを教えたが、金銭を全く受けなかったという。1911年「山岳スキー術」なる著者を出した。更に1906年に「山岳の戦術と軍隊スキー」についての書を出したが、これは今日もなお価値を失っていないといわれている程の名著である。

「スキー講座」I P. 18. P. 81

体育大辞典 P. 936

8. スキーの天才シュナイダーの出現

ノルウェー式とリリエンフェルト式の対立の後暫くは、スキーのターンに技術の重点をおいたイギリスのコールフィールドの理論スキーあたりが流行した程度であった。

この時、ハンネス・シュナイダー (Hannes Schneider 1890—1955) の出現があって、スキーの高速化に拍車をかけることとなった。

シュナイダーは 1890 年オーストリアのチロル地方アールベルグのシュトウベンに生れ、10 歳頃スキーを覚え、ビクトル・ゾーム (V. Sohm) …… “ゾーム・ワックスとアザラン皮を創始した人” などの指導を受け、15 歳頃から各地の大会で優勝し、少年時代早くも、スイス、オーストリアに名声をあげた。オーストリアとスイスの国境近くのアールベルグのサン・アントンのスキー学校の教師となったの

が 17 歳（1907 年）の時であった。

その頃、スキー理論家であると同時に、映画製作の巨匠でもあったアーノルド・ファンク博士に妙技を認められ、有名なスキー映画「スキーの驚異」を二人のコンビで 1920 年に完成し、中欧のスキー界をリードした。

1924 年には 2 人共著で「スキーの驚異」なる本も出したが、これは、スキーヤーの聖典として数年間に 25000 冊を売り切って、世界的に読まれた。そしてその影響する所も大きかった。

彼の技術は、テレマーク、全制動廻からクリスチャニヤ、シュブンクへと高速度の回転を求めて変化したことで、これをアールベルグスキーと呼んだ。かくてサン・アントンは中欧スキー界の中心地となった。

このアールベルグ技法が、時代と共に高速度を求めていた段階にマッチして、そのスピードの故に世界のスキー界をリードし始めたのと同様にして、山岳地に育ったアルペン競技が次第に本格的になって来た。

その他の映画では、リスカムの氷雪を舞台とした山岳映画「山との闘い」や、スキーフィルム「エンガデイーンのキツネ狩り」等を公けにした。

彼の技術が、世界のスキー界に与えた影響は大きい。特にアメリカには圧倒的な貢献をし、1930 年（昭和 5 年）には、日本にも来朝し（玉川学園長小原芳氏の招き）3 月 15 日より 4 月 19 日まで滞在約 1 ヶ月余、各地で講習会を開き、神技といわれる彼の不倒、優美、快速力を示して驚異と感嘆の声を発せしめ、アールベルグスキー術の優秀さを我が国の一般スキー術の分野に根強く植えつけたのである。現在では殆ど総てのスキーに取付けられているスチールエッジのスキーを日本で最初に使って見せたのも彼であった。

「スキー講座」I P. 82 P. 88 P. 97

「シーハイル」小原哲郎編

「学校体育」昭 26 年 11 月号 P. 47

「日本スキー発達史」小川勝次 P. 113

「日本スキー発達史」山崎紫峰 P. 83

9. 日本のスキー

我々が小学校時代、日本で最も雪の多いのは高田地方であるとして、その写真が教科書にのっていたのを覚えている。「この下に高田あり、大小便すべからず」の立札がたてられたとまで言われたとか。

それで日本スキーは、明治 44 年にオーストリアのレルヒ少佐が、高田において指導したのが最初であると一般には言われている。しかし、実際には、それ以前に何回か日本で、スキーが試みられていたようである。すなわち、スキーの道具が最初日本に入ったのは、明治 28 年で、日清戦争に参加した松川敏胤氏³¹⁾（後に金沢師団の旅団長）が、露満国境から一台金沢へ持ち帰ったという記録が、北大スキー部 15 周年記念誌にのっている³²⁾。次いで、35 年 1 月青森歩兵第五連隊の将校他約 200 名の兵士が八甲田山で集団遭難した事件をきいたノルウェー政府が雪中行軍の用具としてスキー 2 台を日本に送って来たので陸軍省はこれを弘前師団に送った³³⁾。しかしこの時は使用法もわからないままに終わってしまったらしい。

更に明治 37 年青森県の人、野村治三郎氏が外国雑誌でスキーを知り、東京の運動具店に 2 台試作させた³⁴⁾。（2 台輸入したとの説もある）

41 年には北海道に瑞西からスキーが入って来て、学生が単独に練習した。

又別に樺太においては、それ以前に樺太独特のスキーがあったらしいと伝えられている。

42 年には、英国大使館付武官ランドリーフが一台を携行して来り、月寒連隊に寄贈し、同年の夏、札幌農学校（後の北大農学部）のドイツ語教師ハンス・コーラー（スイス人）が、チューリッヒから一台のノルウェー式両杖のスキーを取り寄せ、学生達に「これは滑るために、はくものである」と説明して、文武会（当時の学友会）に寄贈したが、機いまだ熟さず、これもそのままになってしまっていた。

42 年 2 月欧米留学を了えて帰朝した永井道明氏も一台持ち帰った筈である。また 43 年杉村虎一スウェーデン公使から陸軍省に二台のノルウェー式軍隊スキーが送られて来ている³⁵⁾。

しかし、ここまでは只スキー用具が、日本に持ち込まれたというだけで、スキー技術が紹介指導されたのは、やはりレルヒの来朝を契機としている。故に日本のスキー術は明治 44 年からということになる。

明治 43 年 (1910) オーストリーの陸軍少佐レルヒが来朝し、高田師団に軍事研究将校として赴任、時の長岡外史師団長は青年将校を集めてスキー班を作り、レルヒの指導で練習をはじめたのが、44 年 1 月 12 日であった。この 1 月 12 日については、別説もあるので章を改めて述べる。

1) 日本スキー開始日諸説

オーストリーのレルヒ少佐 (Theodor Edrel von Lerch) が、日本に来て、高田において青年将校にスキーを指導し始めた日が、明治 44 年 1 月 10 日、12 日、13 日、15 日と文献によっていろいろ違った日付が記載されている。これは「日本スキー史」にとっては紀元節とでもいうべき重要な日なので、今から僅か 55 年以前のことが、こんなあいまいさでは誠にはづかしい困ったことである。

今のうちならまだ当時のことを記憶している人も存命の筈だから SAJ (全日本スキー連盟) あたりが中心となって確認しておく必要があると思う。

先づこれらの諸説を挙げて見よう。

⊖ 1 月 10 日説

①スキー講座巻 1 の 16 頁 (野崎璽氏執筆) に「44 年 1 月 10 日、58 連隊の営庭で 10 名のスキー専修員が、一本杖をもったレルヒ少佐から日本で最初のリリエンフェルト・スキー術を教わった」とあり、

②「日本スポーツ文化史」(木村毅著) の 204 頁には、「その年の 1 月 10 日から、レルヒ少佐所属の高田師団の第 58 連隊の営庭で、先づ平地における基本動作から教えにかかった」とある。

③「スキー黎明」(中野理著) の 40 頁に「1 月 10 日、レルヒ少佐

スキー講習の第一日である」とある。

④「丘陵スキー術」(吉井修七著)の6頁に、「1台を砲兵工廠に送りまねて10台を作らせ1月10日には出来上って来たので連隊長が監督で14名の専修員に教育させ」とある。

㊦ 1月12日説

①「日本スキー発達史」(小川勝次著)の3頁に「明治44年1月12日、ここは高田市の歩兵第58連隊の営庭である。10名の青年将校によって編成されたスキー専修員が、いとも厳肅な恰好で整列している前に、スキーと一本杖を持ってレルヒ少佐が現れた。……これからスキー術の指導を行おうとする所である」と。

②「スポーツ八十年史」201頁……これも小川勝次氏の執筆の所なので①と同様な文面である。

③「日本スキー発達史」昭和11年、山崎紫峰著の368頁に、山口十八(レルヒ来朝当時大尉で、専らレルヒの通訳をした人)の「スキー発祥時の回想」という文章の中に「1月12日、レルヒ少佐指導の下に、研究委員の講習を開始した。爾後3月12日に至る間、まる24日半の講習を以て、技術の習得を終り、スキー術普及の基礎が成った」と記してある。ここで24日半というのは実際に講習を実施した日の総計であろう。

④同書4頁と5頁の間にある「日本スキー年表」に「1月12日より高田第13師団将校にスキー術を伝授す」とある。

⑤高田市郊外金谷山スキー場に建ててある新潟県営シャンツェの説明文の一節に「明治44年1月12日にオーストリアの陸軍少佐レルヒが高田に来て、軍事視察のための一年間余滞在中熱心にスキー術を教えたので……」とある。

㊦ 1月13日説……これはミスプリントではないかとも考えられるのであるが、前出の山崎紫峰著「日本スキー発達史」27頁に「同少佐を教官として同月13日より3月12日まで、毎日一定の実施表に基き営庭、練兵場、舎内、薬師山(今の金谷山)射的場、南葉山、関山演習場、米山、妙高山等段々実技程度を高めて猛訓練を積んだ結果、

一冬で大多数、早くも実技大いに上達した」とある。

㊥ 1月 15 日説

①「Schi Heil シーハイル」小原哲郎編の 374 頁。「日本におけるオーストリアスキー史」(松田仔史氏執筆)の章の「黎明時代のスキー」(この項は、坂部護郎氏の執筆で、同氏は、当時の長岡外史団長の次男で、レルヒ少佐から 2 シーズンに亘ってスキー指導を受けている)の項に、「44 年 1 月 15 日雪の高田に到着し、数日後になって、少佐が東京に着くと同時にもってきた軍隊用スキーと同じものを砲兵工廠で作らせたスキー 10 台が高田にも御目見えした。……明治 44 年 1 月 15 日朝、正確にいうと 8 時半師団長からスキーを指導してくれとの依頼を受けたレルヒ少佐は軍装凛々しく 58 連隊長以下全連隊の少中尉から成る専修員の前に現れた。……この日、すなわち明治 44 年 1 月 15 日が我国にスキーが伝えられた日と日本スキー連盟で決定し、正月 15 日を迎える毎に有意義な行事が繰りひろげられて今日に至っている。」と述べてある。

②「スキー」(福岡孝行…ベースボール・マガジン社)の 138 頁……「15 日から講習が開始された。日本のスキーがいよいよ本格的な軌道に乗った記念すべき日というべきであろう。」と記されている。

③「スキー実用百科」の 136 頁に「44 年 1 月 5 日着任。……そして着任後 10 日後の 15 日には、このスキーを使って、高田の第 13 師団の将校にスキーの技術指導をはじめました」とある。

以上の如く、私の目を通した書から拾いあげただけでもまちまちで、どれが真実なのかははっきりしない。然し次ぎの如き理由から 1 月 12 日説が正しいのではないかと推定される。

レルヒ少佐が高田に到着したのは、1 月 5 日で、午後 5 時 2 分着の列車で到着したことまではっきりしている。中野理著「スキーの黎明」は、レルヒの伝説とでもいうべき本で、その 38 頁に「……翌 10 日午前 11 時半少佐は鶴見大尉、中野通訳と同道して騎兵第 17 連隊に出頭した。伊古田副官が遇番士官とともに出迎え、連隊長室で中山中佐に会い、さらに将校集合所で昼餐の卓を囲み、零時半に退出した」

とあり、51 頁には「……なお、高田新聞と高田日報を見るとスキー練習第一日は1月12日午後1時より営内第一大隊雨覆練兵場で開催されたよう書いてある」と。雨覆練兵場とは、学校で言えば「雨天体操場」のことである。

それではなぜ、スキーを室内練兵場で練習したか、という点について調べて見ると、当時の高田新聞に「第一日、実地練習をしなかったのは、細雨のために雪がしめって滑走がよくできなかったからだ」と記してある。ある本には「レルヒ少佐の第一日の講習は、メテレスキー（スキーを穿け）、オテレスキー（スキーを脱げ）だけの練習で終わった」と書いてあるが、細雨で雪の状態が悪かったので実際滑走の練習はできなかったのであろう。

さて1月10日説がどうして出て来たかという点については、当時スキーの専修員主任であった鶴見宜信大尉が、それから20年後の昭和6年に「日本における最初のスキー」という記事の中に「1月10日、レルヒ少佐スキー講習の第1日である」と、20年後なので記憶が薄れて12日を10日と書いてしまったことが原因だと考えられる。また鶴見大尉が第三日目に営庭から練兵場を通過して郊外金谷山陸軍墓地へ行って猛練習をした日は、新聞その他の記録によって確かに14日であった、そのことから推して練習第一日は1月10日でなく正しく1月12日であったろう。

1月13日説は、山崎紫峰著の「日本スキー発達史」の27頁にある一つだけで、同書の別の所二ヶ所（4頁、5頁間に折込んである日本スキー年表と、368頁の当時レルヒの通訳をつとめた山口大尉が、筐底を探って抄録した回想記録）には、明確に1月12日と記してある所から、ミスプリントではないかと思われる。然し正誤表には載っていない所を見ると、12日は、前述の如くスキーの着脱のみの練習で実際滑走練習は13日であったという意図で書いたのかとも思われるが、若しそうだとすれば矢張り12日を初日とすべきであろう。

1月15日説がどうして出て来たか、その根拠となるべきものがな

いので、それを書いている坂部護郎氏と福岡孝行氏に直接電話できいた結果次の如き返事を得た。

坂部氏は、長岡外史師団長の次男で当時高田中学二年生であったというから、大体の事は記憶にあるということで、レルヒ少佐が明治 44 年 1 月 5 日に高田に到着したが、その荷物が着かなかったため正装して師団長に正式の着任挨拶をしたのが 1 月 9 日で、この時はその挨拶の席に坂部氏も列席したということである。このとき長岡師団長は直接口頭でスキー指導の件を依頼したという、この事から推して、その翌日の 10 日にスキー指導が開始されたとは考えられないから 10 日説は間違いだろう。自分が 15 日と書いた理由は、日本のスキー開始 50 周年を記念して、全日本スキー連盟が昭和 36 年（1961 年）1 月 15 日に、スキー功労者を表彰したが、その際私もその 1 人に加えられた。スキー連盟が 1 月 15 日にこの記念式を行った事は何か根拠があつての事だろうから 1 月 15 日説が正しいのではなからうかと思うとの事で、確たる記憶や記録があるわけではないから、自分としてはこの 15 日説を固執するものではないとの事であった。

福岡氏も 15 日とは書いたが、何によったか、はっきり覚えてもないし、現在では 15 日は間違いで、やはり 12 日の方が正しいのではないかと思うという返事だった。

以上の事から 10 日、13 日、15 日説は間違いで、12 日説が正しいものと考えられるのである。

2) 日本スキーの恩人長岡とレルヒ

オーストリーでは、1900 年（明治 33 年）頃、軍隊にスキーを採用することとし、若い将校を、スタルスキーの弟子として、その技術を修得させた。この将校の中に、テオドル・エードレル・フォン・レルヒ（T. E. Von Lerch）という名門の青年将校がいた。

その頃、日本の「長岡」という将校が、軍事研究のため、ドイツ、オーストリーに派遣されていた。彼こそ後に日本陸軍の航空兵科の生みの親、日本スキー史上に忘れることのできない、そして長い髯で有名な長岡外史將軍であった。

氏が、明治 35 年にスカンジナビヤのストックホルム博物館において、奇妙な細長い薄っぺらの板を見て不審に思い、案内の伊達紀隆という公使館付き武官（中尉）にきいて見ると「これはスキーと言う、早くいえば日本のかんじきのように雪中で歩くものです」と説明された。長岡氏はその時は「ははあ、そうか」といった程度で、名前だけは記憶に留めたが、大した興味をもたなかった。

このレルヒと、長岡とは、ヨーロッパにおいては、めぐり会うこともなく、それから約 10 年の歳月は流れた。

明治 43 年前述の如く、スウェーデン公使杉村虎一氏から二台のスキーとその参考書三冊とが、陸軍省に送られて来て、日本でも試して見てはどうかということであった。

陸軍では「雪国で使うものなら、一つ越後の高田師団にやらせてみよう」ということになった。

丁度その頃、オーストリーの駐日武官として来ていたレルヒ少佐を、日本のどこかの師団に配属させることになっていたが、彼の特技をきいて見ると、スキーは名人だという。むべなるかな、彼こそスダルススキーの直弟子であったのである。早速、渡りに船と高田師団に配することになった。

その時の公文書は、スキー史上重要なものであるので、原文のままのせておく。

「瑞典軍隊用スキー二箇及ビ之ニ関スル書籍三冊、同国駐劄杉村公使ヨリ当省大臣へ寄贈有之候処、今般陸軍第四九八〇号ニヨリ貴師団第五十八連隊付ノ義、御達相成候埃国武官レルヒ少佐ハ斯道ニ熟達ノ趣、右スキー及ビ書籍送付候条、適宜ノ方法ニヨリ実験ノ上其成績及御意見報告相成度依命及通牒候也」

明治四十三年二月二十五日

陸軍省副官 竹島音次郎

第十三師団参謀長渡辺小太郎殿

その時の師団長、輦の將軍長岡中將は渡辺参謀長より、この報告を

受け、かつて瑞典博物館で見たスキーを思い出し、早速これを実施させることにした。時の第 58 連隊長堀内文次郎大佐が委員長となり、7 人の尉官がスキー研究員として任命され、その主任を承った鶴見宜信大尉（後に日光町の町長となった）は、次の如く述べている。「師団長の命で司令部に出頭した、恐る恐る室に入ると、いつも苦虫をかみつぶしたような髯の顔が、今日は何となくおだやかだった。曰く“君達はスキーというものを知っているか”“知りません”と答えると、側にあった長い狭い板べらを指して、“これを足にはいて雪の上を滑って歩くんだ”。と説明され、スキー研究を命ぜられた。

そこで、明石、小山田、堀野、前田、佐藤等の大・中・少尉の委員達は 12 月 29 日に委員会を開き「レルヒ少佐が来るまでに熟達しておいて一つ鼻をあかしてやろう」と盲人蛇に怖じずの相談をし、送って来た三冊のフランス文の参考書を山口参謀に訳してもらって、その虎の巻だけによって、今までみたこともきいたこともないスキーを毎日師団司令部の庭で練習しはじめた。

この時のスキーの一台はノルウェー式のもの、他の一台はオーストリーの軍用スキーで、リリエンフェルト式のものであり、単杖のストックが 1 本のものであった。誰も知らないスキーを何とか足につけて滑ってみたものの、ころぶばかりで、ものにならない。とうとう「この杖が短か過ぎる。輸送の途中、杖が長過ぎ邪魔なので短く切ったものに違いない、こんな 6 尺そこそこでは、屋根をも埋める高田の深雪の底の地面を突けるわけではない」という勝手な珍説を出したのもあった。一本杖の目的が平均をとり廻転軸に使用することも知らず、スキーを船の如く考えて、竿のように使って雪の底を突き、スキーを押し進めて滑るものだと想像をたくましくしたわけである。

いよいよレルヒ少佐が 1 月 5 日に着任して来た。

使用するスキーとしては、オーストリーの軍隊用のものを見本として日本の砲兵工廠で試作急造のもの 10 台を用意して来た。

1 月 12 日第 58 連隊の営庭で 10 名のスキー専修員が、1 本杖をもったレルヒ少佐から日本初めてのリリエンフェルト式スキー術の指

導を受けることになった。その日の少佐は緑色の軍服をつけ、金ぶちの鼻眼鏡、緑色のゲートルに登山靴といういでたちだった。

「少佐は、メテレスキーと号令したが、誰もわからない。通訳の山口大尉が“スキーをはけ”と復令した。我々はこれをきいてもまだどうすることもできなかった。スキーのはき方を知らなかったからである」と鶴見大尉はこの時の光景を述べている。

このような珍談を残して、軍隊にまかれたスキーの種子は、直ちに民間にも移植された。それは長岡師団長が「スキーは軍隊のみで専有すべきものではない。広く雪国の人々に流行さすべきだ」という考えをもっていたからで、この点はスキー発展上幸運な事であった。師団長がこのように理解があったので、高田師団では、地方新聞にその記事をのせて宣伝につとめた。それで新潟、長野の両県知事も中学、師範、高女の教師や、郵便局員にスキーを習得させるため、師団へ練習生を送った。こうして民間にも意外に早く広まったためにその年の二月には、高田スキークラブが設立され、続いて長岡、関山等にもクラブがつくられた。

三月の師団長会議のため上京した長岡中将は、明治天皇に拝謁して、このスキーの事も奏上した。その際、

「どうも長岡は、軍事で御奉公いたしますよりも、この便利なスキーの普及、スキー文明の伝播で御奉公申し上げる方が、後日より多く国家のお役に立つことになるかも知れません。来年の紀元節には信越に続々とできている組織を統合した一大スキークラブをまとめてその発会式を行い、新潟、長野両県知事を地方支部長ということに致して盛大にさせたいと念願しております」。

と申し上げているのを見ると、その熱の入れ方は非常なものであったらしい。

そして明治天皇も、翌年紀元節の発会式には、侍従武官男爵山根貫一大佐もわざわざ差遣されている。その時、乃木大將も（当時学習院長）東京から、はるばる見学に来て、この日、誕生した「越信スキークラブ」の新設を祝って寄付をしている。余談になるが、その時の寄

付は百円だったが、受取った者が数えてみると十円札が 11 枚あったので「閣下、これは百十円あるのでございますが」と恐る恐る問うと「はい、あ、それは一枚余計だった、こんな事では商人にはなれんなあ」といって、その一枚を受取って財布に納めた。

この「越信クラブ」は、その月、レルヒの指導で、スキーを使って、妙高山頂 (2446 m) を極めるまでになった。そして後には「日本スキークラブ」と改称した。

また明治 44 年に五色温泉を根拠として、在日独逸人が「アルペンスキークラブ」を作って活躍した。

その後、長岡中将が京都に転任になって、盛り上った信越のスキー熱も暫くは、嵐の後の静けさの如く、一時下火になった。

3) 日本最初のスキー競技

レルヒの指導を端緒として、軍隊から民間に広まったスキーは、瞬たく間に普及し、日本最初の競技会として、1912 年 (明治 45 年) 1 月 25 日高田郊外南葉山麓から金谷山にわたる 4 軒のコースで、高田師団の将校連によって行われ、当日は 1 m 余の新雪中で、膝を没しながら滑り、木暮少尉が 25 分で滑ったという記録がある。

第二回は「越信クラブ」発会式の同年 2 月 11 日の紀元節に同じコースで行われ、出場者 50 余名に達し、記録も 21 分に短縮された。この競技会は、その後民間の手に移り、毎年開催され、選手は長岡、柏崎、館山、妙高方面からも多数集り、名称も「日本スキー大会」と改められた。種目は滑降のみであり、今日とは違って、リリエンフェルト式の、主として単杖制動が使われた。それでこの競技会の影響を受けた信越地方では、スキー競技と言えば専ら滑降レースを行うようになった。

4) 北海道におけるスキー

明治 41 年から 42 年頃にかけて、2 ～ 3 回北海道に紹介されたスキーは、機いまだ熟さず、そのままになっていた。

そして一方高田や信越地方のスキーが、盛んになり、一時衰微しかけた頃、今度は北海道においてスキーが隆盛になってきた。

高田師団で一応スキー指導の所期の目的をおさめたレルヒ少佐は、大正元年2月に高田での送別競技会を最後に旭川師団に転属となった。そして野砲兵第7連隊付となり、二十数名の将校下士官の指導に当り、羊蹄山（蝦夷富士、1893 m）登山までして、熱心に指導した。こうして、この地でも軍民スキーの発展に貢献したレルヒ少佐は同年秋、任を終えてオーストリーに帰国した。

5) 大正時代のスキー

前述の如く、明治の末から大正にかけて、越信地方や北海道に伝わったスキーは、その後大正3年から5年頃までは札幌を中心として、ノルウェースキーが盛んになりつつあった。しかしスキーは用具に経費を要し、雪国に出かけなければならないので、一般への普及は急速には進まなかった。当時としてはまだ、現在のゴルフ以上に、ブルジョアスポーツと考えられていた。

大正7、8年頃から各大学、高専にもスキー部が設けられるようになり、地方にもスキー倶楽部が生れるようになった。大正11年には早大、法大、東大、学習院の学生達が、「東京スキークラブ」を作った。大正12年2月には大日本体育協会主催で第1回全日本選手権大会を小樽で開いた。この大会の競技種目は、1km、4km、10Km、8kmリレー、ジャンプ、クリスチャニヤ、テレマークの7種目で、競技形式は個人選手権でなく、全国を六地区に分けその対抗戦とした。

北海道や樺太はノルウェー式で、デスタンスやジャンプなどを練習していたのに対し、山の上から滑り降りることのみの信越勢は「スタートとゴールが同一高度にあるレースは競技種目ではない」とデスタンスレースに反対して大論争をしたり、ジャンプスキーを見るのが始めてだったので信越勢は振わなかった。しかしこの競技では技術の交流があり大きな収穫があった。

こうして競技スキーは本格的なスタートをきり、技術はますます向上した。

大正14年第3回全日本スキー選手権大会が終った2月15日に体育協会から独立して全日本スキー連盟が誕生し、青森県大鰐でその発

会式が挙げられた。創立当時の加盟団体は北は樺太から南は神戸までの 20 団体であった。

大正 15 年 (1926) にはラハター (フィンランド) に開かれた国際スキー連盟総会 (F. I. S) に、木原均、今泉剛一両氏を出席させ、正式に同連盟に加入し、オリンピックへの参加準備をととのえた。またこの年「全日本学生スキー競技連盟」も設立された。

かくして大正時代には、一般への普及と国際的進出への、内外に対応する態勢ができあがったのである。

6) オリンピック初出場

大正 15 年に国際スキー連盟 (F. I. S.) に加盟したので、昭和 3 年 (1928) のサンモリッツにおける第 2 回冬季オリンピック大会の招待状が日本へも到着した。

日本から広田戸七郎監督外 6 名の代表選手 (高橋昂、矢沢武雄、竹節作太、永田実、伴素彦、麻生武治) を派遣した。選手一行はオリンピックに出場する前、1 月にイタリアのコルチナ・ダンペッツォで開かれた国際学生スキー大会に出場し初めての国際競技に参加した。レールヒ少佐以来独学の日本は滑降競技には滑降専用のスキーがあることも知らず、幅のせまい国産のレース用スキーで出場するという状態だった。しかし第 1 日目の 16 km 競走に矢沢 4 着、竹節 6 着の好成績を占めて気をよくしたが、2 月のオリンピックは流石に世界の大会で、日本では当時 25 km が最長の距離であったのに一躍その二倍の 50 km に出場した永田選手は完走者 30 名中 24 着で、これが日本選手の最高成績という有様で、複合の麻生、ジャンプの伴選手共に問題にならず、初回のオリンピック参加では多くの新知識のみを土産に帰国したという程度であった。

同年第 1 回全日本学生スキー大会が大罫で、又第 4 回明治神宮大会の新種目としてスキーが加えられ、高田市外金谷山で冬期大会が開かれた。一方赤城において全日本スキーキャンピング大会が行われた。

7) 昭和時代のスキー

昭和 4 年 1 月に、ノルウェー・スキー連盟の副会長オラク・ヘルセ

ット中尉が大倉喜七郎男の招聘により、スネルスルード及びコルテルード両選手を連れて来朝した。目的は札幌に世界的のジャンプ競技場を作ることと、日本の競技スキーの指導とであった。そのため札幌の「大倉シャンツェ」が建設され、高田、野沢、飯山等のシャンツェも改造された。この頃赤城山には、猪谷六合雄氏の努力によって立派なジャンプ台ができていた。この赤城に秩父、高松両殿下をお迎えして模範ジャンプ競技会が開かれ、伴選手はそれまでの記録 28 m を 48 m に書きかえ、猪谷氏 46 m、スネルスルードは 53 m も飛んで観衆を驚かせた。ヘルセット一行は 4 月まで各地を熱心に巡回指導し、技術・施設・大会運営等に大きな進歩を与えてくれた。

昭和 5 年の 2 月には第 11 回国際スキー会議がオスローで開かれ、これに木原均氏を代表として派遣し、麻生武治選手はホルメンコルンのスキー競技会に参加した。

また同年 3 月 15 日より 4 月 19 日まで「スキー界の法王」とまで呼ばれたオーストリアのハannes・シュナイダー (Hannes Schneider 1890—1955) が、玉川学園長小原国芳氏の招きにより来朝し、各地においてその妙技を見せ、講習の天才ぶりを示し当時まだ混沌たる我がスキー術へ新たな一進路を示し、競技スキーよりもむしろ一般スキーの普及と登山スキーに革新をもたらす刺激を与えてくれた。

昭和 6 年頃から、文部省もスキー指導に力を入れるようになり、指導者養成講習会が開かれた。

この年から競技会は成年、壮年、少年と三組に分けて行うようになった。

昭和 7 年 (1932) 米国のレークプラシッドで行われた第 3 回冬季オリンピック大会には、11 名の代表を送り、若冠安達選手は、ジャンプに 66 m を飛び 8 位となり、その他の選手も活躍し、日本は二流国間違いなしという進歩を示した。

昭和 8 年には、ホルメンコルン 50 周年大会 (1883 年 130 名の会員でノルウェー・スキー連盟ができ、その第 1 回大会をオスロ…旧クリスチャニヤ…のホルメンコルンで会催した) に大野精七博士と二選

手（栗谷川、宮村）を派遣し、翌年スイスのウェンゲンで開かれた国際学生スキー大会に9名の学生選手を送り、16 km で木越選手が優勝の栄冠を得た。

昭和 10 年札幌で開かれた第 13 回全日本スキー選手権大会は、質量共に充実し、この前後が戦前における日本スキー界の黄金時代であったと言える。このことは単にスキー界のみでなく、すべてのスポーツ更にひいては日本国威も黄金時代であったわけである。

昭和 11 年 (1936) 第 11 回オリンピックがベルリンで行われ、ヒットラーが最も華やかなりし頃で、その偉力を世界に誇示せんとしていた時であった。この年の第 4 回冬季大会はドイツのガルミッシュ・パルテンキルヘンで催されたのであるが、日本では次回のオリンピックを東京と札幌に招致する示威的意味もあって、広田監督以下 15 名の選手を派遣した。しかし成績は芳しからず、ジャンプに伊黒が 74m で 7 位、安達が 8 位であった。豪胆な竜田は最長飛離をねらって 77m の新記録を出したが転倒と判定された。この大会での収穫は、日本ではまだ単板スキーであったが、先進国では張り合せ合板スキーを使用し軽くて弾力性があり大夫なスキーで成績を挙げていることと、デスタンスにバスカング走法を用いていることを学んで来たことであった。

この年は第 14 回全日本スキー選手権と明治神宮体育大会のスキーが兼ねて、小千谷で開かれ約 1000 名の選手が参加するという盛況さであった。

同年 7 月 IOC 総会で次回第 12 回オリンピックを東京で行うことに決定し、翌年 IOC ワルソー総会で第 5 回冬季オリンピックを札幌で開くことも決定した。日本は朝野を挙げて喜び、スポーツ界は活気を呈し、組織委員会を結成して準備に着手したが、12 年 7 月に勃発した日支事変はますます拡大し、ついに 13 年 7 月 14 日東京、札幌の夏冬季オリンピックを放棄返上するのやむなきに至った。昭和 12 年の第 15 回全日本選手権が大館で行われ、この大会から正式種目としてアルペン競技が認められ、それを伊吹山で行った。

昭和 13 年には世界選手権に選手を送ったが、戦争状態のため外国遠征はこれが最後となった。東京の後樂園と、関西の甲子園では人造シャンプツェを造り、貨車で雪を運んでジャンプ大会を開き、その啓蒙普及につとめたのもこの年からであった。

昭和 14 年頃から、ますます戦時色濃厚となり、国民体位の向上がさげばれ、スポーツはすべて軍部からの干渉を受けるようになった。積雪地方青年の皆スキーとか、国防スキー強化が鼓吹され、厚生省主催による全国スキー講習会が 40 ケ所で行われ一般大衆 3600 人の参加を見た。そしてバジテストも行われ、1 級 2 級の制度を設け一級に 148 人、二級 673 人の合格章を与えた。また一方では第 1 回指導員検定講習会を五色で開き、11 名の指導員を選定した。

昭和 15 年には、すべての競技の遠征旅行も不自由になった。高田で行われた第 18 回全日本スキー選手権には鉄道局、営林局、通信局、警防団、青年団、工場、鉱山、青年高校、軍隊などの団体レースも行われた。この年の第 2 回指導員検定講習会は野沢で開催し、受講者 47 名中 12 名が合格した。

昭和 16 年の第 3 回指導員講習会は札幌、蔵王、土合、志賀高原、大山の五ヶ所で行われ 281 名の受講者から 26 名の合格者を出した。この中には 2 名の女子も含まれていた。

この年は紀元 2600 年記念として、全日本選手権大会に樺太から山口県、朝鮮、満州からも参加し、陸海軍も加えて約 1700 名の選手が札幌に集って盛大に行われた。

昭和 17 年の第 20 回全日本大鰐大会には現役 23 箇部隊の参加があり国防スキーの観を呈した。

昭和 18 年の第 21 回全国選手権大会は第 13 回明治神宮スキー大会と兼ねて日光で開催され、優秀選手も続々召集されて軍服姿で出場するものも居た。この時猪谷千春選手が小学 6 年生で出場し廻転競技で一流選手連を破って話題となり、その将来を期待された。しかしこの大会が戦前の最後の全日本選手権大会となり、千春少年も暫くは雌伏期となってしまったのである。更にこの年の 2 月には東亜競技スキー

大会が満洲国通化市で開かれ 16 名の代表を送り、満洲国選手（全部日本人）と競技したが 62 点对 30 点で日本の勝利となった。

大東亜戦も、たけなわとなり官民から競技スキー審議委員会が組織され、スキーの規格を定め、以後製作するものは、1 m 85 と 95 の二種類に限定され、用材も配給制となった。

この頃、スキー地の雪を追って点々と居を変えていた猪谷六合雄氏は、浅虫の仮住居から、小川勝次氏に当てて「スキーに一生を捧げている自分には、今後ますます技術的に進歩するスキーのことを考え、また一子千春を立派な選手に仕立てることを思うと、どうしても規格スキーをはく気にはなれない。あれでは進歩がない。よってどうか私たち一家が、ここでひそかに今まで通りのスキーをはくことを許していただけないだろうか」という切々たる訴えを送って来た。これに対して批判は、いろいろあると思うが、ここまで一事に徹することの出来る猪谷氏に深い敬意をはらうものである。そして氏は遂にその宿願を達して一子千春を世界的スキー選手に育て上げてしまったのである。今にして思えば、先見の明があったなどと簡単にかたづけしてしまうかも知れないが、当時戦争の真只中にあり、先がどうなるかもわからない。その上世人からはこの非常時にスキーなどに凝って、という白眼視も受けなければならなかったこうした中に親子三人只スキーのみに命をかけて生きてきた人間の偉さは大したものと言わねばならない。これに対し、小川氏は「黙々として雪を追ってスキーと取組み、千春の大成を夢見ている彼の事を考えると、しごく同感の念が湧いた。そこで『御主張ごもっともと思う、機関にかけて、よろしいということとはできないが、問題が起きた場合には引受けるから、千春君が将来りっぱな日本代表選手になるよう指導をたのむ』という返事をした」と。小川氏のこの処置も誠に賢明な当を得たもので、かかる蔭の援助協力があってこそ千春選手の大成があったことを、千春選手は勿論のこと日本スキー界も感謝すべき事であろう。

昭和 19 年には、本土空襲も始まり一切の大会は行うことができなくなり、優勝トロフィーまでも献納されるという有様となった。

8) 終戦後のスキー

終戦の翌 21 年には、全北海道スキー選手権大会だけは、かろうじて開くことができた。スポーツ界の復興は目覚ましく、21 年秋には第 1 回国民体育大会が焼残りの京阪神地区で開催されたが、スキーがこの大会に参加したのは、昭和 18 年第 21 回全国スキー選手権日光大会以来 5 年目の 23 年 2 月で、国体と第 26 回全日本選手権大会を兼ねて、野沢で開かれた。この当時は選手の用具はまだ貧弱で、一流選手には未復員の人もあった。猪谷千春選手は、戦時中からの親子の努力が報いられて、新複合競技に優勝して注目をひいた。この年冬季オリンピックがスイスのサンモリッツで開かれたが、日本には招待状が出されず、参加できなかった。

24 年の札幌大会では選手 2 名が死亡するという事故があって競技会運営の面や選手の態度に反省を促す機会が与えられた（この時の死亡の原因は一名はコースからはずれたため、他の一人はゴール前で応援者に無理に走らされて疲労その極に達したのであった。そしてこの選手は替え玉で身体検査も受けていなかったという不祥事であった）

昭和 25 年の五色、米沢での第 28 回大会では、アルペン競技に電気時計を初めて用いた。この年、皇太子がスキーを始められて、一般の関心も高まり漸く戦前のレベルに戻ってきた。

昭和 27 年 (1952) はオリンピックの年で、第 6 回冬季オリンピックが、オスローで開かれ、8 名の代表を送った。世界のレベルから置き去りにされていた日本選手の持参したスキーには博物館級のものもあり、スラローム用、ジャンプ用のスキーは現地で新調せねば使えないという悲しさであった。ジャンプのフォームなども、以前とは全く変わっていた。猪谷の大回転でさえも 20 位に終わった程であった。

昭和 29 年には、世界スキー選手権大会がスウェーデンのオーレとファルンで開催され日本から 12 名の代表を送ったが、大した成績ではなかった。

この年 2 月フランスからピエール・ギヨーとアンリ・オレイがスキ

一連盟の斡旋で（経費は国鉄と朝日新聞社で負担）来朝し、各地で、パラレル技術の中軸とするフランススキーを指導した。そしてギヨーは次のような感想を述べて日本を去った。

「日本のスキー人口の多いのには驚いた。世界一でないかと思う。はいているスキーは大体長過ぎるし、性能もよくない。あれではうまくなれないし、良い選手も生れない。スキー場の施設も不十分である。どこのスキー場のリフトも短い」と。氏の批評は確かに当たっていた。この頃はスキーも随分普及し、都市から出かけるスキーヤーの駅での混雑ぶりは大変なものであった。しかし用具は一般に粗末なものが多く、相当金のかかるスポーツであるから若い人や、安サラリーマンでは一通りの用具を揃えるのも大変であり、人のものを借りて出かける者も相当あったようである。

フランス・スキーが入ってゲレンデスキーは一変した。シュテム系統が殆んど姿を消し、パラレルのままで回転にもって行く美しいスキー技術が目標となった。

昭和 30 年には片桐、橋本の両名がフランスに赴き主にシャモニーに滞在し近代のスキー術たるフランス・スキーを学んで帰り、その普及に努めた。

昭和 31 年（1956）第 7 回冬季オリンピックは 1 月下旬から 2 月にかけて、イタリアのコルチナ・ダンペッツォで開かれ、日本から野崎監督以下 7 名の選手が送られ、回転で猪谷千春選手がザイラーに次ぎ第 2 位となり、冬季大会で最初の日の丸を掲げたことは、日本スキー史上記録すべき一頁であった。

昭和 32 年 4 月には、前年のコルチナ大会のアルペン三種目の覇者トニー・ザイラーが訪米の帰途、リーダ選手と共に日本に立ち寄り、この年の暮には、「オーストリア・スキー教程」が公にされ、世界に広まった。

33 年 1 月には、サンアントンのアールベルグ・スキー学校長であり、オーストリア職業スキー教師連盟会長のルデイ・マッティ氏が産経新聞の招きで来日し、オーストリアスキー術の実演指導をした。氏は

シュナイダーの後継者でもあり、世界スキー指導者会議におけるオーストリアのデモンストレーションの映画を、わざわざスイスで買って持って来た。今日、日本で行われているバインシュピール技術（Beinspiel, 脚部の軽快な左右に動く技術）は、この時からのものである。この一ヶ月間にわたる七ヶ所での実地指導と、映画、講演は、数年来日本で流行していたパラレルを中心としたフランス・スキーから一挙にオーストリアのバインシュピール技術に切りかえたのであった。

34 年から 35 年にかけて、映画撮影のために、ザイラーが数ヶ月滞在して影響を与えた。

更に 34 年 4 月には、ルデイ・マッ트가再度来日し、スキー連盟の中央研修会が万座で開かれオーストリア・スキーの把握を深めた。また 36 年には、オーストリアのスキー教師、フランツ・デルブルが来日して、バインシュピール技術の洗練化に貢献した。

38 年 2 月には、世界スキー指導者会議の会長でありオーストリア国立スキー学校長である、シュテファン・クルッケンハウザーが、フランツ・フルトナー・バルトル・ノイマイル等を連れて来日し、更に 39 年から 40 年の冬期にかけても数名の助手を連れて来り、オーストリア・スキー術の奥義を伝達し、日本スキー界に大なる貢献をした。

参考文献

- 1) 「スキー」, 福岡孝行 p. 126
- 2) 「日本スキー発達史」, 山崎紫峰 p. 7
- 3) 野口源三郎講義ノートより
- 4) 「丘陵スキー術」, 吉井修七, p. 1 「Ski ジャーナル」 No3 (スキーする神々) 野口源三郎講義
- 5) 「スキーの黎明」, 中野理 p. 52~53
 - 4) p. 2
- 6) 「日本スポーツ文化史」, 木村毅 p. 197
 - 2) p. 7~9
- 7) 2) p. 9
 - 1) p. 126
- 8) 「Mit Schuh und Ski」 Henry Hoek p. 28
- 9) 2) p. 5~6

- 10) 新エツダ (散文エツダ, スノリエツダ) ……フィンランドの史家ス
ノリ, ストウルソン (1172~1241) の収録したもの.
1) p. 127. 「Ski ジャーナル」 No. 1 p. 49
- 11) 「Ski ジャーナル」 No. 1 p. 49
- 12) 11) p. 49~51.
- 13) 「スキー実用百科」, 福岡孝行執筆 p. 308
- 14) 1) p. 127
- 15) 「スキー講座」 I. p. 10
- 16) 「体育大辞典」 p. 551
- 17) 1) p. 127
- 18) 「丘陵スキー術」 吉井修七 p. 3.
- 19) 「スキーの黎明」 中野理 p. 17.
- 20) 「日本スキー発達史」 山崎紫峰 p. 9
- 21) 18) p. 3
- 22) 11) p. 51
- 23) 19) p. 17
- 24) 20) p. 13
- 25) 「学校体育」 昭和 26 年 11 月号 p. 45
- 26) 「アメリカスポーツ史」 山中良正 p. 90
- 27) 「スキー講座」 I p. 11
- 28) 「スキー」 福岡孝行 p. 128
- 29) 「スキー講座」 I p. 12
- 30) 「スキー講座」 I p. 12
- 31) 「スキーの黎明」 中野理 p. 19
- 32) 「日本スキー発達史」 山崎紫峰 p. 15
- 33) 「同上」 p. 15
- 34) 「丘陵スキー術」 吉井修七 p. 4
- 35) 「日本スキー発達史」 山崎紫峰 p. 16 「スキー」 福岡孝行 p. 137
「スキー講座」 I p. 17 「スキー実用百科」 p. 364

(昭和 41 年 12 月 17 日受理)